



三
つ
し
ろ
の
こ
ゝ
ろ

畑三四郎

掌篇集

百二十万人もの自閉症者がこの日本には存在する。その事実は、偶然によって生じたものではない。そう最近思い始めている。自閉症者とは社会に適合できない者達なのではなく、幾世代にも渡る不可知の力が働いて、社会に適応しない新しい人類を生みだそうとする進化の予兆なのではないか。

十七歳の少女が私の目の前で、しっとりしたクレパスを動かし、つぶし重ねた狭間に繊細な線を浮き上がらせていた。自閉症が人間の新しい進化を暗示していると思いはじめたのは、この研究所で彼女と接するようになってからだ。遺伝因子、重ねられて濃くなった先祖の血がこの少女を作り上げ、その血が社会への適合を拒否させているのではないか。

そんなことなど知る由もなく、少女はただひたすら、魅せられてしまうほどの静謐な瞳を画用紙に注いでいた。

奈々美の脳の中では直感像記憶が無尽蔵に存在し、その一つが呼び出されているのだ。一度見たものを細部まで写真のように記憶した情報を使い、紙の上に突如として現れたのは、緻密な細い赤線を重ねた今にも天につき刺さりそうなヤジリのない槍だ。槍の根もとは何物にもつながらないまま、奈々美はふいに画用紙を上下にひっくり返す。こんどは、弓なりに曲がった鉄骨のような柱で四隅を囲み、四角いビルを逆さに描きはじめる。まるで柱は逆転した地を支えるように扇状に上に広がり、天に成り代わった地面を灰色で埋めてゆく。唐突に、画用紙の中央あたりに描き出したのは、上に四角、間をおいて下に小さい円盤のようなもの。それぞれにいくつもの窓が青と白の調合で見え始めるのだ。縦方向に散らばった部品を書き終わると、奈々美はひとり微笑んで、それらをつなぐ赤い鉄骨を描きはじめた。自然に学んだのであろうか、鉄骨の一本一本は斜めに渡された支柱にも遠近がしっかりと描かれ、奥行きが見事に現れてくる。それは逆さに描かれた東京タワーだった。

奈々美の口もとが柔らかく動く。

「地球を回しているの」

私は精一杯の笑顔で絵が良くできていることをほめ上げるのだが、ほめ言葉にはまったく反応せずに、画用紙の隅の灰色を指先でこすっている。

「ああ、そうか。このタワーの針先で、奈々美は地球をコマのように回しているんだ！」

思い出したように私が言うと、目元をゆるめて清白な顔を上げ、両手をかるく左右に伸ばして

立ち上がり、その場で踊るように回りはじめる。奈々美は絵のできばえに興味があるのではなく、上手くなるために書いているのでもない。他人の評価など眼中に無く、自分の中の喜びは自分で自在に表現したいだけなのだ。顔に表わせない喜びは体の中でのたうって動きとして出てしまう。時には全裸でゆったり踊りはじめることもあった。羞恥を感じないという特徴の一つ。羞恥心という感情が社会的に作られたものにしか過ぎない事を私は学んでいた。

奈々美の場合、アスペルガー症候群（高機能自閉症）なのだ。その原因が脳神経のミラー・ニューロンの活動低下であることは間違いなかった。奈々美は他人の動作に共感を感じることも無く、反応することもない。しかし、心を閉ざしているわけではない。奈々美は奈々美自身であろうと、ただ、ありのままにふるまっているように私には思えてしかたがなかった。それゆえ、他人と上手くやれないだけなのだ。他人との妥協や駆け引きや追随を知らず、本来、人間関係を円滑にするための応答感情さえも捨て去った存在なのだ。孤立の種と呼びたくなるくらい、社会の一員であることを体全体で拒絶している。人の遺伝子の新たな叫び、十七歳の少女には、荷が重過ぎる孤高の戦いに挑んでいるように感じて、私の心は騒ぎ立った。奈々美と一緒に、戦う相手も分からずに戦いたくなる自分がいた。しかし奈々美の表情には気負いもなく、ましてや私に助けを求める気配は微塵もなかった。

「奈々美にとって、お父さんはどんな人？」

「大事な人」

これまでの研究では、家族か他人かということが奈々美の対人関係を決定付けていた。親族と他人との間に峻烈な線引きが存在するのだ。身近にいる親族に対しても同じ答えが返ってくるが、毎日のように付き合いのある隣のおばさんには、答えが返ってこないのだ。私は答えやすい二つの選択支の問いに作り直す。

「じゃあ、隣のおばさんは普通の人かな？ それとも大事な人？」

「大事じゃないよ」

「では、隣のおばさんは好き？ それとも嫌いな人？」

「大事じゃないから、好きでも嫌いでもないに決まっているでしょ。それくらいわからないの？」

線引きの原動力は、社会的な立場で人間を評価するのではなく、奈々美の心情的で確固とした、ある価値感が存在し、それにより身内と他者を必要以上に区別していることがはっきりする。

あるいは身内という血のつながりではなく、別の情的な感受性が基になっているかもしれない。半年前、私への評価が隣のおばさん以下であった。しかし最近、それが少し変化してきているのだ。

「じゃあ、私はどんな人？」

「大事になるかもしれない人」

「どうすれば君の大事な人になれるの？」

「いい歳して、そんなことも分らないの？」

奈々美にとってはとても簡単な図式が存在するらしい。それを理解できない我々は愚か者と言う事になるのだが、奈々美の表情には怒りも哀れみも表れない。私が切に理解したいのはその図式で、それが分かれば私はもっと、奈々美の内側に入っていけると思うのだ。

奈々美を見つめる自分の眼差しの変化に気づいたのは最近の事だ。もっと彼女に認めてもらえるようになりたい——そう思っている自分に驚く。奈々美の寡黙な横顔に魅せられて、心中、恥らうような気持ちまで存在することに気づいた時は愕然とした。なぜ、単なる研究員の私が恥じ入るのか。羞恥は社会的な関係性をもたらすもののはず。私は奈々美との関係を社会的な枠に押し込めようとしているのだろうか。

クリスマスイブの夕刻、両親から許可をもらった私は奈々美を外に連れ出した。奈々美は体をゆるく揺らし、華やかに飾られた銀座通りをゆっくり首を振り、クリスマスソングに時々頭をかたむけながら、私のコートの袖口をそっとつまんでついてくる。イブの飾りつけで華やぐ楽器店から流れてくる曲に、奈々美はふと立ち止まり、また頭を横にかたむけて聞き入る。チェロが奏でるアリアに彼女がかすかに反応したことを私は見逃さない。私が一步店に近づこうとすると、奈々美が積極的に袖口を引っ張ってドアをくぐった。

店内は、疎らな客でざわめきは無く、陳列された様々な楽器の間を歩くうちに、試し演奏用のキーボードの椅子に、奈々美が無造作に腰掛けた。そして人差し指で鍵盤を押す。ドの音が響き、ミの音が続き、ソの音が重なった。

「ドは私が地面に立っている音、ミは猫の声を聞いている私、ソは赤ん坊の笑い声」

他の音階を試すように押していた人差し指が止まり、突如、飛び回るようにしなやかな奈々美の指先が踊った。奈々美の演奏が店内に流れるチェロのアリアを追いかけ、かぶさり、混ざり合

って、うねるような音場を作り出したのだ。書類に目を落としていた奥の店員が目を見開いて顔を上げ、他の客達が音源を探るように顔を巡らせ、奈々美のそばに寄ってきた。

私だけが、奈々美はピアノなど弾いたことも無い事実を、サヴァン症候群が現われたことを知っていた。奈々美の中では音は音でなく、音以上の意味とイメージを伴っているのだ。音楽サヴァン達が共通に持つ絶対音感に、映像の直感像記憶に加えて、奈々美の一度聞いたら忘れないという異能が音にもあることが分かった瞬間、初めての即興演奏なのだ。

私は胸の辺りをかすかに締めつけられて、切ない波に飲み込まれ、空間の密度が高まり圧縮されたかのように錯覚して足もとがぐらつく。青い波が押し寄せ、波頭が銀色に飛び散り、次々と覆いかぶさり、砂浜に泡のように吸い込まれてゆく。まるで音の海だ。鍵盤を見ることも無い奈々美は、一人、中空に眼差しを注いでこぼれる音の波に目を細め、飛び交い、ぶつかり合う音が、色や形として見えているかのようだった。

奈々美の指先が止まると、客も店員も顔をゆるめて大きな拍手をおくり続けた。しかし奈々美はいつものように無表情のまま両手を開いてゆっくり回り、空間に残る余韻を味わっていた。

「奈々美、このキーボードは大事なの？」

「とても大事。パパとママは音楽が嫌い。私は大好き」

私は大きな箱に詰められたキーボードを抱えて、クリスマスのプレゼントだと告げた時の奈々美の表情をじっと見つめる。視線を合わすことも無く、唇も、眼差しも動かない。私は言い方を変えた。

「奈々美には音が見えるんだね」

「見えないの？ 音が遊んで、手をつないで、心の中を撫で回すのに」

「残念だけど、僕には見えないよ。でも、奈々美の演奏はとても気持ちよかった」

「見えないんだ。でも感じるのね」

奈々美はそう言うと少しあごを上げ、歩きながらつまんでいた袖口を離して私の手を初めて握る。イブの夜の冷えた夜気の中、私は奈々美の手のひらのぬくもりを、閉ざされた世界に光を差し込む窓を開けたかのように、愛しいと思った。 (了)

エデンの青い果実

ヤハウエ・エロヒムの秘密の果樹園はエデンと呼ばれていた。

幾重にも重なるたおやかな丘がエデンを取り囲んでいる。うねりを見せる丘の頂上には間隔を置いて、猿人のように毛深いケルビム族の若者達が見張りをしている。

ヤハウエの命により昼も夜も松明を燃やし、危険な獣と、エデンから追放した種族の進入を防いでいた。

物見の丘の裾野からは泉が湧き出て小川となり、密のように甘い水が静かにエデンに流れ込む。無数に咲く花々が、胸を膨らませて吸い込みたくなるような香りを放つ。温暖な気候と甘い水でエデンの果樹も途切れる事無く実り、熟れた果樹は雫として見えそうなくらい、濃密な匂いを放っていた。

ヤハウエは近隣の人族から生まれた兄妹を幼少の頃よりエデンにおいて育てていた。その二人をアダムとイブと名付けたと、そうセフィロト文字でセツの石版に記している。

その石版にはアダムとイブはお互い一緒に暮らしていながら、お互いを知らずにいたという奇妙な関係であったと書いてある。その意味が追々、この物語の中で語られるのだ。

もう一人、アダムと同年のルシフェル族の若者が二人の面倒を見ていたという。名は記されていないので、仮にルシフェルと呼ぶことにする。

この物語は、そのルシフェルの容貌に変化が生じて猿人とヒトを合わせたような顔立ちになり、アダムの喉仏が大きくなり、イブの胸が豊かに膨らみ始めた頃、異様な事件が起こったことから始まる。

イブは生まれたままの姿で、風に揺れる枝をつたうルシフェルを見上げていた。

ルシフェルはイブのためにいつも果樹や木の実を取るのが日課だった。

木の実をイブのそばに落とすと、ルシフェルは太い枝に腰掛けて、韻をふんで喉をふるわせる。母音だけの言葉にならない音が風を震わせ、イブの耳元に小波のように届く。

ルシフェルが喜んで、心地良い時に歌う響きだ。

イブは手近い果樹に手を伸ばして桃をもぎ、ルシフェルに呼びかける。木の上から彼が身軽に降り立った。彼のちくちくする背中に、イブは飛びつく。桃をルシフェルの口にかじらせ、残りを頬張った。

口まわりの甘酸っぱい汁を舌でなめて、舌で届かないところを指先で拭い、ルシフェルの額やほほになすりつけた。

ルシフェルはいやがりもせずに、イブを背中に乗せながら果樹園を吹き抜ける風が心地良いのか、喉から低い音を響かせた。

日が翳り、辺りが柔らかい夕闇に包まれても、イブはルシフェルの背中に乗って、胸のふくらみから伝わるルシフェルの息吹を楽しんでいた。

こらえきれない疼きがイブの体の中をのたうっている。まるで小さな蛇がいるかのように、やわらかなかゆみのような刺激が下腹部と胸の内側でうごめいているのに気づいていた。

イブは思い切って背中から飛び降りると、胸をもみしだき、股根を指でひっかいてみた。頭の芯がぐらつくような気がして、ルシフェルに助けを求めるように微笑みかけた。

ルシフェルの腕がもりあがり、荒々しい風のような息遣いがイブの耳もとを吹き抜け、小波になったルシフェルがイブをゆさぶる。突き上げてくる心地良い刺激が脳に達している。背筋から首にかけて筋肉の筋に力が漲り、声にならない呻きがイブの口から漏れた。

津波がルシフェルを仰け反らせている。彼は虚空を睨み、強く震えた。

イブの脳の中にも、知恵の木の果実が閃光とともに溶け始め、眉間のあたりに殴るような光をしばしば発生させていた。

闇だった部分が突然光によって暴露されるように、かつては感じた事も無かった奇妙な自覚がイブを襲った。ルシフェルという自分以外の生き物と下腹部でつながれているにも関わらず、初めて、そして奇妙にも一人であることの孤独を感じたのだった。

苦痛に耐えるように眉間を寄せていたイブは、うっすらと開いた瞳から雫をこぼし、柵に閉じ込められた家畜のような肉体のうねりがいつの間にか消えて、空虚になった自分に満足している自分に気がついた。

力が抜けたルシフェルの毛深い顔が、イブのつるりとした柔らかい胸におおいかぶさる。一つになっていたイブの体に、少しずつ分離感が戻ってくる。

分離する感覚など、ルシフェルとつながる前は知らなかったことだ。他人とつながって初めて感じた自分の孤立だった。つながるためには初めに個であらねばならなかったのだ。

それはルシフェルもまた同じはずだった。相手を通して自分の存在を感じさせる知恵の果実。《知恵の果実は食べてはならぬ。一度でも食べれば、お前は欠けたものを埋め合わせようと男を求め、男に支配されることになる》

イブの神、ヤハウエ・エロヒム達はそう戒めを与えたが、イブは、身の内が焦がされるようにくすぶる衝動にあがらえず、未知なる体験を思うとぞくぞくするような興奮に身を任せて、アダムとは比較にならないほど野生的で頼もしいルシフェルに抱かれたのだ。

言葉の代わりに歌う寡黙なルシフェルの歌声に、心がとろけ、誘われてしまったのだ。

一緒に遊んだ子供の頃のルシフェルには、体毛も生え揃わず、眉根も盛り上がり、アダムとほとんど同じだったのに、いつの間にか無骨で野生的な顔に変化して、ケルビム族に似た太い眉根の下には沈みこむような瞳が静かにあった。

肉食獣とも素手で戦えるがっしりした体軀からは、懐かしいような渴いた干草の匂いがして、イブはルシフェルを抱きとめて胸の鼓動に聞き入った。

アダムとイブに、果樹園の中で生きてゆく術を教えたのは彼、ルシフェルだった。その独特の勘で一緒に遊びながら何が危険で何が安全かを、静かな表情と歌うような叫びで教えた。

イブはヤハウエ・エロヒムの言葉の教えより、ルシフェルの歌の教えを愛していた。

ふいにルシフェルが、イブを突き飛ばすかのように褥から離れて、草葉の影でうずくまった。喉を鳴らしながら苦しげなうめきが、唇からもれた。

大きな朧月が、ルシフェルの横顔を蒼白い影に染めている。イブが感じたと同じような孤独を

、感じ始めているのだろうか。あるいは子供の頃に引き離された部族のもとに戻りたいと思っているのだろうか。

ヤハウエ・エロヒムと似た女と結ばれたルシフェルを襲った心情は計り知れないが、果実を食べなければ一生知ることの無かった、一つに結ばれなければ、けっして感じる事の無かった、一人で生まれ、一人で死にゆく事実を恐れているのかも知れなかった。

存在していることへの目覚め、知恵の中の知恵とよばれた能力が、頭の中にできあがってしまったのだ。あるいは、肉体は似ていても異質な女と交わって、それでなおさら、己が同類から離れて戻れないような不安に苛まれているのかもしれない。

イブもまた同じように不安と恐れに苛まれていた。イブの眼差しも落ち着き無くルシフェルの横顔をすり抜け、園のどこかにいるアダムを探して、泳いでいた。

ルシフェルでは欠けたものを補えないと、満たされないものがあると気づいたのだった。急に寂しいような寒さを感じて、イブは震えていた。

イブは立ち上がり、股根を震える指先で拭う。その指先には、薔薇の棘で指先を突いたときに滲み出た同じもの、イブはそれを朧月に翳した。

兄妹として育ったアダムをそそのかすのは、アダムに他愛の無い遊びをさせるようにイブの肉体に誘うだけでよかった。

イブが導いた事が終わっても、アダムはルシフェルと違ってずっとイブを離さず、イブの胸を優しく愛撫している。

何も感じないのだろうか？ イブやルシフェルのように他者を通じて自分を感じることができないのだろうか？

アダムが指先でイブの髪の毛をつまむと、耳もとに口をよせて囁いた。

「愛しい妹。我らは結ばれた。ヤハウエの戒を破った我らは、これから一つになって生きてゆこう」

「にいさん、寂しさは感じないの？」

「お前がいれば、なぜ寂しい？」

イブとアダムはお互い欠けていたものを手に入れたはず。だがそれはイブにとって、アダムを所有しなければならず、自分もアダムのものになることだと気づくには、イブはまだ幼かった。

日が西に傾き始めても、アダムとイブは抱き合いながらエデンを歩きまわった。一緒に育ったお互いが、気がつかぬうちに求めていた片割れだったことは甘酸っぱく、胸がしめつけられ、イブはアダムの笑顔と厚い胸の平たい曲線を愛で、突然頼もしくなったアダムの言葉に聞き入っていた。

頼りなげにいつもぼうっとしていた兄だったのに、イブの知恵の果実を食したアダムは自信を得たように大人びて見えた。

もやを含んだ風が涼しく二人の裸体を吹き抜け、果樹の枝葉を揺らしざわめく。黒雲が天にせり出すように、広く西の空を覆いはじめ、日差しが弱まり辺りはしっとりとした影に包まれた。

ヤハウエ・エロヒムの一人が白い岩陰に佇んで、蒼い双眸を見開き、膝下に怯えるようにうず

くまるルシフェルの頭に手を置いている。

「女よ」と、イブに眼差しをすえた。

イブはアダムにすがりつくと、理由も分からず膝頭が小刻みに揺れるのだ。

「戒を破るも自由」

するなと言われればしたくなる。それはわかっていたとヤハウエは静かに言う。ただ、命の木に至るといふ道を与え、それまでは知らないでいて欲しかったのだと視線を落としながら諭した。

命の木の果実は、個体としての完成の果実、アダムとイブがそれぞれ別に実らせるべきものだったと、がっかりしたように言うのだった。

だが、命の実が成るまえに、知恵の実を食してしまったアダムもイブも、これから他人を通してしか、自己を感じる事ができなくなったと、かすかに顔をしかめて結んだ。

「それにしても、道は閉ざされたわけではない。我らが歩んだようにするだけのこと」

そうヤハウエは気を取り直したようにつけ加えると、ルシフェルの肩を抱き、立ち上がらせた。

ルシフェルは視線を誰とも合わさずに、果樹園の向こうを探るように見つめて、呆けたように何かをさがしていた。

「だが、お前達二人が知恵の果実を知ってしまった以上、ルシフェルとその一族の道は閉ざされた」

言葉を話さず、言葉で無いものをルシフェルから学ぶのが、命の果実を得るための近道だったと、ヤハウエは二人にはとうてい理解できないことを言った。

イブが膝を落とし、哀願するようにヤハウエを見上げる。

「私と結ばれたルシフェルはどうなるのです？」

アダムが両肩をぎくりとさせ、首を回して傍らのイブを凝視する。

ヤハウエは無言だったが、アダムが擦り寄って、イブの両肩を抱きかかえてうめくように言った。

「イブは私のものです」

ヤハウエは哀れむように表情を曇らせ、無数の細かな皺の寄る唇を動かした。

「アダムよ、お前は女を自分のものであると信じて、真実を見いだすまで苦しむであろう」

「真実など知りたくもないし、たとえ苦しもうと、私の望みはイブと共に生きることだけです」

かつての穏やかなアダムは消え、たぎるような熱情がアダムの若々しい唇から迸る。

降り始めた雨粒がアダムの肩に白い気を立ち昇らせた。

強く抱きしめられたイブは喘ぎながら、自分がアダムのものであるという事実を考えていた。アダムのものでありながら、アダムとは別個の存在として感じる自分の中の分裂を嗅ぎ取っていた。

震える視線を再びヤハウエに向けると、強い眼差しを返された。

「イブよ、知恵の種がお前の中で、芽をだしたようだ。お前の腹から生まれ出る子孫に、それは伝わるであろう」

ヤハウエの指先が二人を差し、それに誘われて、アダムとイブが立ち上がる。

「男と女よ、お互いをよく見てみることだ」

飲んだ水を出す場所でしかなかったお互いの局部に視線が止まる。

イブの内股には血がこびりつき、アダムのそれは汚れて無様に垂れ下がる。

イブが近くの無花果の枝を折り、葉の茂りで股根を隠す。アダムにも枝葉を渡す。

お互いをつないでいたのはここなのに、なぜ隠すのかイブにはわからない。ただ見られたくないと思ったのだ。

二つの者が一つにつながったときの自分を思い出す。何も思わず、波に飲み込まれたひと時、お互いの動きと声と匂いさえ覚えていても、そこにいたのはアダムでもイブでもなかった。

それを知る前は、アダムの立ち上がる根を見ても、自分の股根が開かれてアダムに見えていても、排泄さえもお互い気にも留めなかった場所が、今は無性に見られたくなかった。

「個としてあれば知らずにすんだものを……」

激しい雨が辺りを襲い、ルシフェルがヤハウエに手を引かれて林の奥に霞んでゆくのを稲光がとらえていた。

エデンを追われ、東の丘を越えた地にアダムとイブは二人で生きることを赦された。

地を耕し、森に獲物を求め、獣を家畜として二人は生き続け、多くの子孫を残してアダムは死ぬ。

イブは、息が途絶えて冷たくなったアダムの体を、小高い丘の上の白い岩に横たわらせて、ずっとそばにつき添い続けた。

ふと気がつくとき、エデンの出来事を、知恵の果実のことを、ルシフェルのことを思い出していたのだ。

夢のようでもあり、しかし記憶は鮮明でいきいきとして、手を伸ばせばルシフェルに触れることができそうなくらい、イブは全ての過去が今もそのまま存在して味わえるように感じていた。

来る日も来る日も、イブはアダムの崩れゆく体のそばで、肉が腐り落ち、虫がわき、異臭を放ちながら骨を見せる様を見続けている。

雨が降り、風が吹き、土に変じてゆくアダム。

《お前と一緒に生きて、幸せだった》

息が止まり、神の霊が抜ける間際にアダムはそう言った。

片割れが土になり、イブは個になったことに気がついた。

しかし丘の裾野に目を移せば、イブから生まれた最初の女兒、ルシフェルの子孫達がアダムに似た姿で増え広がっている。

《あなたがいなくなっても、ごらんなさい。私は個になれないようです》

エデンの西の丘に目を移せば、同じようにエデンを追い払われたルシフェル達が、蒼く霞む岩山の穴蔵に、蛇のように隠れ住む。めっきり人数を減らした一族は、他の族や獣によって、殺され、奪われ、打ちのめされて、逃げ隠れしながら生きていた。

今は亡きルシフェルの無骨で静かな横顔を、イブは思い描く。

片割れになれなかったルシフェルが、風の中で、恋人を探しあぐねて、翼をはやし、高い空か

ら遠い昔の誰かを探しているのではないか。

知恵の果実を知る前の青くて切ない匂いが風に溶けている。

丘を吹き抜ける風音の中に、ルシフェルの哀しい歌が聞こえたような気がするのだった。

(了)

廃墟の内壁に描かれていたものは、乾ききらない鮮血と乾いた血がこびりついたようなどす黒さ――まるで体内の血液がすべて投げつけられたかのような壁画だった。殺風景な内庭の埃っぽい壁の一角に、大きな左右開きの扉を思わせるアンバランスな比翼の壁が伸び、中央から赤黒い邪気が噴出しているようにも見える。

僅かに左にずれて引きずりこむような暗黒が滲み、私を冥府に誘い込みたいのか、深淵の口が見事に描かれていた。

立ち尽くすように魅せられた私は、軽い眩暈のような当惑を感じながら作者が吉良錬治であることを、筆使いは異なるが一目で色使いと構図にあの男らしさがあることを見抜いた。

手足の自由を奪われた吉良は、きっと口で刷けを銜えて描いたにちがいない。無言で置かれた小さな椅子が暗黒の入り口を塞ぐように置かれ、誰もそこにいないことによって、吉良が私に何かを語ろうとする演出だと知った。私が自虐に苛まれることを望んだ完璧な小道具でもあった。そこに吉良が座っている幻をいとも簡単に思い描けたからだ。

《多々良、やはり来たか》

そう幻が語り始める。

それとは別に、異形の化け物がすぐ後ろの赤黒い穴の縁から私を凝視しているような視線さえも感じ始める。

《おまえのために描いた。おまえがもうこれ以上、私の模倣をしないで済むよう》

穴蔵の奥から聞こえるような吉良の声に、身震いして冷や汗が噴出す理由を探すまでもなく、私は本当の理由に気づいていた。その微かな気づきが私の崩壊を防ぐ最後の支えであることに、密やかな覚えがあった。さもなくば、戦慄き震えている体が地に崩れ落ち、叫び声を上げたい衝動に打ち負かされるか、いっそのこと全てをさらけ出すために全裸になり、この壁画の前に額づいたかも知れない。

内心の声が嘔吐したがっていた。手足を奪ったのは私だと。反面、それをさせないものが蠢く。画家としての名声の失墜、弟子達の失望、世間の嘲りと落ちぶれた己の先の姿が浮かぶ。皆、在ってはいけない光景なのだ。そう思うと、萎えそうな気力を振り絞り、再び吉良の壁画を睨みつけた。

上空は風があるのか、小さな塵屑が無言の椅子の前に舞い降りて来た。

無理やり破門にした弟子の吉良がビルから身を投げたが、九死に一生を得た話は随分前に聞いた。脊髄が損傷して、手足が麻痺したことも。同情を寄せる表情を作りながら、吉良が二度と絵筆を握れなくなったことに、内心の顔がにやりとするのに気づいていた。

私のアトリエには吉良の残した習作が四十枚もあった。そのすべて、一枚一枚を私は心の底から渴くように愛していた。どれも壊れそうな構図に、色彩の渦と荒々しいタッチが辛うじてバランスを保ち、言葉にできない深みが生まれていた。深みはあるときは光へ、あるときは自由で怠惰な開放へ、時には、この壁画のように暗黒への誘いだった。

天賦の才、あの男はそれを自ら気づかずに持っていたのだ。

「お前になど、画家の才能はこれっぽちもない。止めてしまえ」

十年も付き従ってきた吉良に私は冷たく言い放った。私の無意識の渴望を鎮めるために、堰が切れるように飛び出た言葉だった。絵筆一筋に家庭を犠牲にしてまで従ってきた吉良はその夜、ビルから身を投げた。

吉良が居なくなって見ると、深夜のアトリエで私は、吉良の残した習作を前に佇んだ。脳の中で鈍い音がした。得体の知れない衝動が奏でる雑音だ。誰も居る筈の無いベランダに不気味な目線を想像してカーテンを閉じる。

萎縮した心とは裏腹に、その日を境に私の作品は深みを増し、美術展で批評家の目に留まるようになる。

私の新作が四十枚になると、パトロンの画廊から個展開催の誘いがあった。個展のキャッチは《円熟の境地、多々良良蔵展》だった。マスコミも騒ぎ、後援会も浮き足立った。

最終日、賑わう個展会場に電動車椅子で吉良は現れた。啞然として出入り口で立っていた私の目の前を吉良の横顔が無表情で通り過ぎる。脇のレバーにくくりつけられた右手を体全体の傾きで操作し、車椅子は私の作品一枚一枚を凝視してゆく。脇の下から冷たい汗がふき出した。挨拶を交わす来賓の言葉もうわの空で、私は低いところを彷徨う吉良の頭を追った。

賛辞と握手を求める参観者に気を取られ、吉良を見失い動揺すると、目の前の腰の辺りに忽然と吉良の顔が飛び込んできた。額と手のひらがじっとり濡れる。

「多々良先生、久しぶりです」

抑揚の無い吉良の声が耳に響く。平静を保とうと、己の顔の表情を探した。

「ところで、先生に是非見せたいものがあるのです」

吉良はそう言うと言い封筒を差し込んだ上着の胸ポケットに眼差しを移した。

私を凝視する無感情な眼に魅入られて、受け取るか受け取らないか一瞬逡巡した我が手が伸びた。

吉良の車椅子が方向を変え、車輪の軋む微かな音が遠ざかる。吉良の姿が扉の向こうに消えると、詰めていた息が吐き出された。

《あなたの求めるものがあります》

そう書かれた紙切れと、壁画の場所の地図が入っていたのだ。

夕闇の中で、赤黒い冥府への入り口を持つ壁画が徐々に色を変えて深みを増す。知られてしまった己の罪。もう、隠し通すことは適わないのだ。にも拘らず、決して唇にのぼることのない囁きが内心で湧き上がる。

《吉良が死んでいれば》

罪は罪を重ねる。罪がその重さに耐え切れずに崩壊するまで。それに気づいた私は、ふつつつと煮えたぎるような異様な力を胃の辺りに感じた。

ふと気配を感じて、上を見上げた。

人が落ちて来る。車椅子の影と一緒に。

私は棒立ちになり、一瞬でそれが吉良の復讐だと悟った。刹那、人体と車椅子が地面に叩きつ

けられた。人体は自制を失って四肢があらゆる方向に飛び跳ねた。

車椅子は跳ねて、車輪を下にして着地するとまるで意思を持ったかのように無人のまま惰性で走り出し、無言の椅子を蹴散らして、壁画の奈落の入り口に突き当たり、そして横倒しになった。車輪がカラカラと回り続ける。

渴く喉を押さえて、動かない吉良を見る。マネキンであると気づくのに数秒。だとすれば、吉良が屋上に居ると思ひ至るのにさらに数秒。私は屋上を睨んだ。

「吉良、何の真似だ！」

得体の知れない恐怖で、喉が割れるくらい、腹が震えるくらいの声だった。動物の咆哮、断末魔のような叫びだった。

傾いた日差しがビルの屋上だけを明るく照らしている。壁画は黒い影に埋没し、私の声は穴の底から響くように聞こえたにちがいない。微かな笑い声が上から木霊のように降りて来た。抑揚の無い吉良の声が続いた。

「多々良、それは贈り物だ」

「悪ふざけもいい加減にしろ！ 言いたいことがあるならばはっきり言えばいい。俺は逃げも隠れもしない」

虚勢という言葉が相応しい自分の台詞。自棄になって初めて出る開き直りだった。

突然、吉良の声に甲高い感情が迸った。

「多々良！ 吉良錬治は、死んだ。お前に我が作風を与えて、画家として完全にこの世から消えてやろう」

慟哭に似た叫びだった。また、小さな箱が投げ捨てられた。竦む私の前に砕けるように絵筆と絵の具が散らばった。割れたパレットが私の足元に飛んできた。幾重にも塗り重ねて硬くなった絵の具がこびり付き、親指を差し入れる小さな穴から割れた上半分だった。色をこね、重ねてキャンバスに塗り置いていた吉良の姿が脳裏をよぎる。

アトリエの窓際で、細身の体を猫背にして、画布に注ぎ込む吉良の思い――私はいつの間にか跪き、割れたパレットを広い上げた。吉良はすでに、パレットにさえ親指を差し込めないのだ。そう思いつくと、吉良の声が静かに届いた。

「多々良、お前の罪を描け。お前のような人間の屑にしか描けない作品を楽しみにしている」

笑い声が左右の壁に添って反響して、正面の壁画の奈落から聞こえた。赤黒かった壁画は闇に沈み、今や谷の裂け目の洞窟のように、大きな口を開けていた。その前に立ち尽くす罪人は紛れも無い私だった。人間の屑と呼ばれた私は、濃くなる闇をかきわけるように近づいた。転がる無言の椅子と車椅子の間、弟子からの贈りものにこの手で触るために。

空気が淀み、かび臭い匂いが漂った。ざらつく冷たいコンクリートの肌に指先を這わせる。感触に飽き足らずに、私は拳を固めると打ちつけた。何度も何度も鈍い音を立てて、奈落に落ち込む穴があってほしいと望んだ。そこに堕ちてしまいたいと思うほどに力が入った。拳に痛みが走り、皮膚が破けた。自虐が痛みを遠ざけていた。

「多々良、忘れるな。それがお前の描くもの」

吉良の声は語尾がかすれていた。

私は叫び声を放ち、頭を打ちつけた。一撃で視界が一瞬白くなる。頭蓋が響く。脳が悲鳴を上げた。憑かれたように、叫び続け、更なる痛みを求めて二度、三度と上体をそらせ、勢いをつけて打ちつけた。吉良が描いた奥に飛び込めるまで。（了）

三種の土偶（桃太郎異聞）

細流の音が、夜明けのしじまに浮き出して聞こえる。雪解けで水かさが増してきたのだろう。物音を立てぬようにそっと表に出た。

田畑に屍が転がっていたこの村にも、穏やかな日々が戻って久しい。その惨い過去を隠すように薄霧が垂れ込めて、桃木の五弁の花明かりがうっすら映えている。あの子が川上から流されてきた日が昨日のよう。

桃割れの形をした小舟にうずたかく花々を積んであれば、それは山に棲む異人達の、それも貴人の野辺送りの風習だった。

その船から赤子の泣き声がした。どんな理由か知る由もない。が、貴人が赤子を捨てるなど、推して知るべきことだった。忌むべき年日に生まれたか、不吉な徴が読まれたか。

大きな赤子を抱き抱えると、火が付いたように泣いていたのが嘘のように止み、萎びれて乳も出るはずのない乳房をむさぼった。透き通るような白肌に金糸の体毛を絡ませて、見開かれた目には吸い寄せられそうな碧玉が宿る。それはもう倭人の子にあらずであった。

ふいに太い腕に後ろから抱きつかれた。いつの間に起き出したのか、この婆の体をすっぽり包むような息子の大きな胸板には懐かしい匂い。乾いた芝にくるまれたようだ。

「しばらく会わんうちに、かか様がまた小さくなってしもうた」

国一番の力持ち、大きな体のくせに、甘えた声を高い鼻梁に響かせた。

「もう、起きたのかえ？ まだ早かるうに。とと様と一緒に寝ておりなされ。今日は長路の旅立ちというに」

「だからですよ。かか様に甘えたいのです」

薄壁の向こうから「太郎」と爺様のとぼけ声が漏れてきた。いつもの寝言だった。

息子は十四の時に武人の将に見初められて遠地に赴き、数々の武功を上げ、大人になって帰ってきた。そして、座も暖まらぬうちに鬼退治に行くという。前の小川が注ぎ入る大海の彼方に、鬼と忌み嫌われる異人達が棲む鬼ヶ島があった。

胸がちくちくと疼く。そこは太郎の生みの親がいるに違いないと知るのは爺と己のみ。かつて異人は上流に棲み、追われて島に逃れたのだから。言うべきかと迷う。言わないまでも、なんとか争わずに済めば……。

袖をまさぐり、赤子の太郎と共に船にあった三種の神々を取り出す。小さな土偶であった。両手で聞き耳を立てる思慮深い猿神様。雉神様は雛をかばうように翼を広げている。前足をたたみ寝そべっているのは牙を隠した犬神様。土偶が身動いで太郎を見た気がした。

「これをお供にお連れなされ。そして争う前に、これを異人達にお見せなされ。良く話を聞き、慈愛をもって、お国に馴染ませるのです。これが太郎殿の心であると、これが和の国であると申し上げなされ」

聡明な太郎なら、太郎の出自は自ずから分かるはず。鬼達もまた、太郎を知るはずであった。そしてこの婆の、育ての母の気持ちも。（了）

静寂を妨げるものがほとんど回りに何も無い。と、気づいたのはそれほど昔ではない。

ゆっくりとだが、私の回りを包むものが流れてゆくを感じる。それはどんよりとしていたが、誰かに抱かれたような懐かしさに似ていた。

私にとってそれは、安心して浸れる感触、熱くもなく寒くもない、人肌のような愛撫とも言えなくもない。動くことも、騒ぐこともできないが、受容そのものになりきってみれば、あたりに様々な出来事が起こっているのにも気がついた。

それは.....闇の中で、お互いを呼び合う掛け声にも聞こえる。哀しみをたたえた、遠くで動く物の声のようだ。彼方のそれはとても大きい生き物なのだろうか。彼の動きがここまで伝わり、ぶるぶると私を包むものが揺れ、騒ぎ立った。

意識を持ったのはいつのことだろう？ ずいぶんと長い時が流れた感覚のような、微かな記憶の残滓のようなものがあるのだ.....。ということは、眠っていたのか？ 夢を見ていたのか？

そう感じていたのだから、もしかしたら大昔からすでに、意識の根のようなものがあったことになりはしないだろうか？ 意識も心も無かったけれど、それが夢であれ、眠りであれ、長い時間が流れたことを、感覚として記憶しているのだから。太古の記憶、五感に係わるいかなる記憶も無いが、時間が過ぎ去ったことだけは感じる。これは一体どういう事だろう。

意識の根.....、いや、意識を意識として感じられる意識の主か。この暗黒の中で自分の存在を感じられる、存在するための基。

私が誰であるか？ 私がどこにいるのか？ この二つはずっと心の隅にある疑問だ。だが、語りかける者と言え、自分しかいないし、聞く者も自分だけだ。

悲しくもないし、べつだん嬉しくもない。虚無に落ちてもないし、何かに駆られているわけでもない。

心に染みこんでくるものもある。漆黒が揺らぎ、ほの青い明るさを感じる時があった。それは時々訪れた。小さな揺らぎを感じ、しばらくすると青い光が彼の顔を映し出す。光をもたらす天界の使いとしてはグロテスクだった。怒ったような、自分の体さえ飲みそうな大きな口にはとげとげしい歯が牢獄の檻のように立ち並ぶ。赤泥色のぶよぶよした皮膚に覆われ、銀色の丸眼の間に一本の角が伸びていた。その先の突起のようなものが、球状の視界を幻のように映し出している。その光に誘われて、他の小さな蠢くものが近づくと、ぱくりと飲み込んでしまうのだ。

しかし、その淡い光のおかげで、回りが少しだけ分かってきた。と言っても何かがあるわけではない。不毛と呼ぶに相応しい灰色の地がどこまでも広がっているらしい。もっとも全体が見えたわけではなく、彼が移動する回りは皆同じだからそう想像するのだが。

そして彼の回りには、いつも天からゆっくりと白いものが降り注いでいる。

暗黒の天には何がいるのか？ あの白いものは一体なにか？ 私が誰であるかより興味がわく。だが、それを知らうと彼に話しかけても、せんのないことだと最近では諦めてしまった。

ふいに、私以外に話しあえる存在がいないとすれば、私は誰でもないということになると気づ

いた。ここ以外の場所を知らないとすれば、ここはどこという疑問も意味をなさないかもしれない。

でも、なぜ私に意識があるのだろうか。

視覚はときに訪れる彼らによって、微かに与えられ、触覚は回りのゆるりとした流れを感じ、大差のない匂いも時折運ばれてくるし、遠くにいる生き物の悲しい声が虚ろに聞こえるのだが。

外のわずかな変化は感覚としてわかる。だが、それに意味はない。それを意味として私に結びつける内部の対象がないのだ。そしてそれを伝えるべき他の誰もいない。

意味がなければ、この意識も意味がないのだろうか？ 自問自答していることに意味はあるのだろうか？

いや、それでもこの意識は確かなものだ。それに、たった一つの記憶を持っている。途轍もない長い間、眠っていたという感覚。その後に、目覚めたかのようにこの意識が現れた。

だが、この意識はここに縛られて孤立している。ささやかな、そして意味のない回りに起こることだけを傍観している。見守ることしかできないものとは一体なんなのだろうか。

絶望的であっても、それを遙かに超えた厳かな事実。きっとそれは、気づいていたくせに認めたくなかったことなのだろう。

だから私は、もしかしたら……。 (了)

一、祐樹の怖れと憂鬱

頭上から響いてくる耳に痛いようなレールのきしみは、高架を通過する鉄のカゴに詰め込まれた人間達が発する叫びのように聞こえた。寒の戻りの刺すような冷たい風が、つむじ風のように高架下の歩道からぶんと吹き出して、行く手を遮るようにコートの裾も髪の毛も打ち殴って行く。隣を歩く何も知らないフィアンセの綾香が、思わずトレンチの襟を重ねた。私の足先は重く、気が進まなかった。

だが、すでに妹の加奈が高架の下で佇んでいる。二年ぶりだが見慣れた顔、二十歳を過ぎてても暗い幼さが残る。それは兄の自分が与えたもの、その鬱々とした慚愧の想いに締め付けられた。

目を背けたくなるような、加奈のどこか哀しいような薄笑いは隣の彩香に注がれていた。かすかな隈ができた暗鬱な目つきで、これまでの鬱屈した想念を彩香に伝えようとも言うのか、それでいて小馬鹿にしたような無言の眼圧に呼吸が止まりそうになる。彩香の横顔も微かにこわばった。

職探しのためと称して上京した加奈は、内心では就職するつもりなど全くないのかもしれない。それを理由に、私と同居して、私の今の現実を壊すつもり……、いや、それ以上に、そんな復讐じみたことではなく、ただ単純にあの頃に戻りたいのかもしれない。暗くじめじめして心は荒んでいたが、日陰の湿り気に隠れていられたあの頃、二人だけの極み。それがもう不可能であることを、これから私は妹にわからせることができるだろうか。

こんな所でひっそりと、じっと待っていた加奈の存在が、急に痛々しく思えてくる。思い詰めて、斜に構えて、過去を断ち切れないうまま、兄の亡霊を引きずってきた目の前の加奈と、幼い頃の無垢な妹が重なる。私の胸中では大事にしたい方が勝って行く。私のゆがんだ笑顔に、加奈はとどめを刺すように甘えた声を浴びせた……。

二、彩香の計算違い

女の、それも三十路を過ぎた女の感だろうか。

それがどんなものだとしても、目の前に立つ小娘の中に敵に違いない何かがある。そう、頭の芯をちくちくと刺激するマナーモードの着信バイブのような警告を感じていた。

風が収まり、漂いはじめた高架下の饅えた匂いも、微塵の飾り気もない薄汚れた通路の壁も、普段は見せたこともない祐樹の歪んだ笑顔も、この娘の周りにまといつき、小娘の見えない外套に違いないと思った。

あと三ヶ月だったはず。形を作るまで、誰にも邪魔されないように、祐樹とはすでに同棲していたのに。

壊れそうで、ナイーブで、同僚とうまくやれない祐樹を力で導いてきた。私に繋がることで、社内の逆風を追い風に変えてきた。欠点を笑って見過ごせるように、至らなさを謙虚さに魅せて

、暗さを温和しさと従順さに変えて、社内でひととき目立つ有能社員に見えるように背中を押し
てきた。

祐樹の内側は私が一番良く知っている。だから私は選んだ。自分の歳と、容姿と、自分の器を
省みて、祐樹を選んだ。祐樹の弱さでは、私の過去に立ち入れないと見込んだのだ。それでよい
、それでよいはずだった。

二人だけの生活に、就職活動のためと突然割り込んできた目の前の祐樹の妹。うまくやれると
高をくくっていた。それが、加奈の目を見たとき、棒立ちになってすくんでしまった。

私に似たもの、いや、それ以上に、この小娘の内側に隠された異様な匂いをかぎ取った。まるで
つぶされて挽肉になった固まりから、やっと自分の形を作りあげたような、一線を越えてしま
った存在だと、私がわからないはずがない。

身震いを気取られないようにするのが精一杯だった。加奈は私を見透かし、小馬鹿にしたよう
にまなざしを兄に移した。

三、加奈の無謀な跳躍

加奈には怖いものなどあろうはずもない。人の道からずれていたのは、ずいぶんと昔のことだ
。だが、それを超えて兄と別れて過ごした五年の間に、外見上は普通の女子大生として過ごすこ
とができたのだから。

加奈が内面と外面の違いをはっきり意識したのは最近だった。同時に、外見を装うことに飽きた
のも最近であった。それはあまりに退屈で、窮屈で、全くくだらないと思い始めていた。

今は秩序なき自由な心に従って、好き勝手に振る舞うことに快感を覚えはじめていた。その快
感の元をたどろうとすると、兄祐樹の顔が浮かんだ。会いたいと思った。理由ならいくらでも繕
える、兄妹の間柄なのだからと、きのみきのまま上京してきた。

目の前にいる兄のフィアンセは想った通りの女だった。整った顔立ちに厚いファンデーション
を塗りたくり、凹凸を強調しながら、目尻下を薄くピンクに染めて、恋に落ちた女を演出して
いるわざとらしさに反吐が出そうになる。乾いた目の色に潜む冷たい陰影までは消せやしないと、
加奈は斜に構えて彩香を睨んだ。

兄を絡め取る理由など、骨の随まで兄を知る加奈にとって、すぐに想像できてしまう。それこ
そ三十路女のべとべとしたパターンだろうと見切っていた。ガラス細工の兄を真綿でくるむよう
に見えるその視線に、意図があるとわかってしまうのだ。兄はふぬけにさせられたようだ。兄の顔
のこわばりが哀しい。

兄と婚約したと聞いたときから、胃の辺りでぐつぐつと蠢いていた何か、この女を見た瞬間
に爆発しそうになった。我を忘れる寸前に、かろうじて、それでも兄がこの世の仕来りに従いた
いのなら、目を覚ましてやれば良いと考え直した。加奈は彩香から視線を逸らし、兄に笑顔を向
けた。

「にいさん、わたし、お邪魔虫でいるつもりはないよ」

表裏の意味を持たせた言葉に、兄が目を見開き、不安と切なさをないまぜにした。

(了)

一乗谷に沿って、百年の雅を飾った小京都が燃えている。織田の軍旗に蹂躪されて、城下町の家々も田畑からも炎が上がり、煙が谷風に乗りこの山頂の城にまで登ってきていた。生木が燻された刺すような匂いにも動ぜず、三の丸の上楼閣から見渡しているのは、朝倉義景の側室、小少将であった。雪の降る朝、義景がその雪をも凌ぐ肌の白さを褒め称えたことから、雪の前と呼ばれていた。

世継ぎの愛王丸と手をつなぎ、越前朝倉家の滅亡を見ている。滅びを受け入れたこの女は、真夏の燻された煙混じりの風を浴びながら鬼気迫る壮絶な眼を見開いていた。

麓にある雪の前の館、湯殿や義景の母の館からも、雑兵の勝ちどきの声が、柱の崩れる音と共に風に乗って届いた。その度に三歳の愛王丸が母の手を強く握り締め、口元を不安げに歪めている。

中腹の小見放城も最早、火に包まれた。山上に築かれた城の下手、千畳敷に向かって放たれる火矢が無数に飛び交う。凶暴な人食い蟻の群れが山道に連なり頭を蠢かす。弓が矢筒の中で揺れ、鉄砲の砲身が針のように無数に突き出ている。人が人を殺す。なんのためにか。いつか皆死ぬ身であるのを知らぬのか。

火矢が近づいてきていた。一の丸が業火に燃え尽き、二の丸にも火の手があがると、最も高台のここ、三の丸にいた忠義の武士百名が山道に躍り出た。討ち死に覚悟の錐のような一団が、悲壮なときの声をあげ山道を駆け下りる。が、鉄砲の音が途切れせず響いたかと思うと、あっけなくばたばたと倒れ伏して、皆、動かなくなった。

雪の前は全てを見ていた。その玉の如く砕け散った一団の中には、夫義景の衆道相手、且つ、雪の前の情人、王欄がいた。

雪の前と義景は一人の男を同じように愛した。それは義景も承知のこと、元はと言えば、雪の前を王欄に賜ったのは義景であった。義景の留守に、王欄を慰めよと。雪の前は二人の男を受け入れたのだった。

――愛する王欄とは、儂が最もかわいがるものを分かち合いたいのじゃ。

王欄に抱かれて、雪の前は魅せられた。王欄は雪の前を天女のように遇し、義景が雪の前を慈しむ以上に愛してくれたのだ。

三人共々、閨を合わせることもあった。

雪の前と王欄を結びつけていたのは義景であり、そして雪の前は、王欄にとっては人ではなく賜った物であった。だからこそ、雪の前は義景より王欄を愛した。物のように扱われる女にも心ありと。

王欄の死を遠目に覚えた雪の前は、鬼と見紛うほど、目をつり上げ、怒りに顔を土気色に染めていた。そして夫より大切な心の奥底にしまい込んだ男の死に、悲しみを感じる間もなく、妻子を捨てて逃げ出した夫義景を憎んでいた。それがあの男の本性と見切っていたのだ。

ここで、母子とも自害しなければならない理不尽さに歯がみをしていた。目も眩むほどの怒気に耐えていた。自分の意志に反して、武家の女として、息子の愛王丸を殺して、自分も自害しな

ければならないことなど、腸がよじれても受け入れられないことであつた。

——人も生き物も、命が尽きるまで生きようと足掻くのが道理。なぜに滅びの家の体面のために、己も子供も死ななければならないのか。

と、雪の前は全てが憎らしくばかばかしい。

——それが証拠に、夫の義景は、王欄を囚にして、妻子も捨てて逃げたではないのか。生き延びれさえすれば、世継ぎはまたどこぞで作れば良いとでも考えたに違いない。

真一文字固く結ばれた唇には、八重歯がその思いを証するようにのぞいていた。

義景は、体面のために我を張り、何度も信長を討つことが出来たにもかかわらず、詰めを知らず結果を後手にした。武田信玄が上洛するときさえ、加勢すれば信長にとどめを刺すことが出来たのだが、信玄に天下を渡すことになると嫉妬して、軍を退いた暗愚。それゆえに信長が生きながらえ、今、その信長に朝倉家は滅ぼされようとしていた。

だが、そのような暗愚な主君に王欄が殉じることも、愚かしさを乗り越えて、皆犬死に違いないと、雪の前は思い込んでいた。

その煮えくりかえる腹、だがそれにも増して、今、鬼畜のように情け容赦なく、雪の前の町に火を付ける織田の兵。それはこの世が、雪の前に突きつけた現実、あと数刻の母子の運命を無理強いていた。

侍女千世が白無垢の死装束に白木の小柄を懐に忍ばせ、しずしずと雪の前に歩み寄り側に控えた。裾には鮮烈な血飛沫が散っていた。

「小太刀は一人でもできると申しますが、若輩も多く、おびえ震えておりましたゆえ、相打ちにて、皆ともども合い果てました。お先に三途の川向こうにて、お待ち申し上げております」

千世の表は蒼白、だがまなじりは決していた。唇に震えもない。襖三つほど隔てた控えの間には、すでに侍女達の屍が折り重なって、事切れているのだ。

「お前も犬死を望むのかえ」

含み笑うように雪の前は尋ねた。

「世の定めでございまする」

「妾も愛王丸も死なぬぞ」

「落ち延びることはかないませぬ」

「それでも、自害はせぬ」

楼閣の外に飛び交う火矢を、千世は眼を細めてみた。鉄砲が梁にはじける。千世は顔色も変えずに言い放つ。

「焼け死ぬは長く辛く苦しみまするぞ。愛王丸様のことをお心にお留めくださりませ」

「我らが女子供の苦しみて、この世に恨みを残せるのではないか」

「恨みは残せましょう。しかし、奥方様も愛王丸様も、その分以上に苦しみましょうぞ」

人とは本来、安楽な生を望むもの。だからこそ、死の苦しみを刹那に縮めてなお、死さえも安楽にしようということか？

ものの心は、十字に腹をかき切って、己の臍物を投げ捨て無念を晴らす。しかし、死を覚悟して刃を突き立てても、体が痛みを嫌い、見苦しい命乞いをするこゝもあろう。故に、首を切り落

とす介錯を欲す。介錯人がいなければ喉をかき切る。

恥辱を晴らすために、恥辱を受けぬために、意地のために己の死を型にはめこむ。

死を怖れるのではなかろう。母子を死に追い込んでいるこの世の仕組みが、まるで愚か者が作りあげた知恵の足らぬ細工ように思えるのか、反吐がでるほどそれを拒絶していた雪の前であった。

――家も気にせず、体面も飾らなければ、自由に生きられるのが人なのではないのかしら。

薄ら笑いを浮かべた雪の前がそう囁いた。雪の前は逃げようと思っていたのだ。いつそれを実行に移すか、時を待っていた。

仕来りに染まった側女達を先に自害させ、その上で足手まといの愛王丸を殺し、身軽になって一人で逃げる。子供など、また作ればよいと心の中で嘯いていた。ましてや義景の子であった。何をためらうことがあろうかと。

雪の前自身が、まるで物か石ころのように育てられてきた。女は男の地位を高め、家を守るために生まれてきたと、ずっと仕込まれてきたのだった。

夫も逃げ、想い人も死んでみれば、雪の前は、生まれてはじめて、自分の意志で生死を決めることが許されたのだ。

火矢が音を立てて飛び込んできた。一本が数本に、数本が数十に、畳を燻り、梁を穿ち、柱を突いた。薄綿の煙が襖にせき止められる。火が集まり炎となって、障子をなめてゆく。

「奥方様、千世の最後をご覧ください」

懐から小太刀を抜き放ち、鞘を後ろに置く。懐紙で白刃を包み込み、二寸ほどの切っ先を光らせた。

愛王丸が煙りに噎せ、泣きじゃくる。

子供の頃から見慣れた千世の顔は、諦めと覚悟で清々しい。胸を膨らませ、腹に気をためた。切っ先を首横に付け、肩で弾みを付けると掛け声もろとも、血の道を一気にかき切った。

血吹雪が煙りに散った。

「愛王丸様……、痛くは……ありませぬぞ」

途切れ途切れに言葉を吐く。どくどくと肩に溢れる血潮が波打つ度に、眼を虚ろに、体を揺らした。

「ただ……、待てばよいのです」

静かな声でつぶやくと、ゆっくり前のめりに倒れ伏した。

時が来ていた。急がなければ煙に巻かれて、逃げ出せなくなるのだ。雪の前はのめった。

笑顔を浮かべて愛王丸の前にしゃがむ。背に回した左手に力を込めて抱き寄せた。右手で後帯に刺していた小太刀をつかむ。だが抜けない。膝が床に音を立てるほど震えていた。雪の前は短刀さえ抜けないでいた。

――我が子を殺して生き延びる母がどこにいる。

「はは様、こわいよう」

愛王丸が体を震わせる。噎せる。顔が歪む。

子供を殺してもなおも生きるか、一緒に死ぬか。一緒に死ぬなら、一緒に焼け死ぬか。愛王丸

には焼け死ぬのが良いのか、刺し殺したらいいのか？ 雪の前は回りを見渡すが、煙も火も答えも出さず。

煙がすでに立ちこめていた。袖口で愛王丸の顔を包むと抱きかかえる。階を覗く。赤い業火が蠢いていた。選ばなければならない時に選ばない者は、地獄の亡者が嗅ぎつける。それだけでなく、女は極楽浄土にはゆけないものと、仏の教えがあったのだ。

雪の前の顔が奇妙に歪む。

「いざ、地獄へ」

雪の前の背筋が伸びた。逡巡もなく、暴れ騒ぐ愛王丸をきつく抱きしめ火炎に白足袋を踏み入れた。雪の前は階を下る。裾が焦げ、袖が燃え、愛王の髪に火が移る。愛王の体が激しく暴れた。それでも一段一段と、雪の前はさらに両腕で我が子を締め付け、階を踏み下って行く。

愛王の肉が焦げ、顔が崩れた。つかんだ手すりに雪の前の指肉がこびりつく。眼が焼けて何も見えず、鼻も耳も唇も焼けてふさがれた。黒い影になった雪の前は一まわり小さくなり、階を下がって行く。愛王はすでに焼け落ちて、雪の前の黒い両の手だけが虚空を抱いていた。（了）

ミラー・ニューロン 掌篇集

読んで頂いて、ありがとうございます。
こちらのミラー・ニューロン、追々掌篇を追加するつもりで頑張っています。

傾向はどちらかというと、
作者の好きなテーマを集めています。
これからもよろしくお願ひします。

もう一つ、掌篇集を作っています。

「ホミニドの歌と踊り」

<http://booklog.jp/item/3/53939>

こちらの方はもうちょっと
ほのぼのしたテーマが多いです。
こちらもよろしくお願ひします。

なお、小説家志望の仲間を集めております。
一緒に頑張ろうというかた、コンタクト下さいね。

著者：畑三四郎 hatasanshiro

E-Mail. hata.sanshiro@gmail.com

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hatasanshiro/profile>

ブログ カキコミュ（作家志望仲間のブログです。できたてほやほや^^）

：<http://monokakicom.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53522>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53522>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ